

現地通信

マラヤ大学

「日本研究講座」の発足

森 口 兼 二

はじめに

マラヤ大学の「日本研究講座」は、昭和41年度からの日本外務省による東南アジア5カ国への寄贈講座のひとつである。外務省は、これにさきだち、昭和40年11月からタイ国タマサート大学に対する講座の寄贈を試みており、このタイ国への派遣講師団のひとりに、「東南アジア研究」誌上でも「アカ語の研究」を発表された桂満希郎さんが、日本語講師として参加された。今回、同種の外務省寄贈講座がマレーシア・ホンコン・インドネシア・フィリピンを加えた5カ国に拡張されることになったのは、タイ国タマサート大学での成功経験に基づいているものと考えてよいであろう。

ところで、しばしば「東南アジア」とひとからげに扱われる習慣の一般化にもかかわらず、東南アジア諸国の国情にはそれぞれ著しい相違があることは周知の事実であり、寄贈講座の受入れ方にも大きなちがいが見られるようである。この相違は、文部省から5カ国の寄贈講座の模様を視察に来られ、5月20

日マラヤ大学を訪問された柴沼事務官が、帰日後さっそく寄せられた筆者への手紙にも強調されていた。だが、現に確認されつつある受入れ国側の受容態度の相違は、その実施にさきだち、外務省から寄贈予定国に向けて出された意向打診の照会文書に対して、各国から寄せられた回答にも、すでに明らかにかがえた。そうして、卒直に言って、マラヤ大学からの回答には、同国唯一の総合大学としての誇り高い態度がにじみ出ており、「マラヤ大学全体の教育組織や行政を乱したり、その水準を下げるような安易な寄贈では困る」と要約してよい意志表示が、はっきりとうかがえた。その一端は、「派遣講師団は、新学期開始の数カ月前に大学に到着し、同大学行政の組織に精通した上で授業に参加してもらいたい」という希望に象徴されている。実に堂々とした、爽快な受容態度である。結局、栗本一男・前田成文両講師とわたくしが現地に赴くのは、新学期開始の3カ月前ということで了解を得たが、先方の態度が毅然としたものであっただけに、出発前の雑務整理に追われながら、第一陣として派遣されることになったわたくしどもの気持は、正直いって並ならぬ心理的負担であった。

出発前後の事情

いよいよ2月10日出発ということで、外務省に連絡に赴いた2月9日になって、それも出発のあいさつの最中に、「出発1週間見合わせよ」というマレーシア日本大使館からの電報が届いた。電文ではよく分からないが、理由のひとつは、まだマラヤ大学の理事会がこの案件を最終的に通していないことをにおわせていたので、心ないさかさな心配をしながら待機していた。1週間して到着し

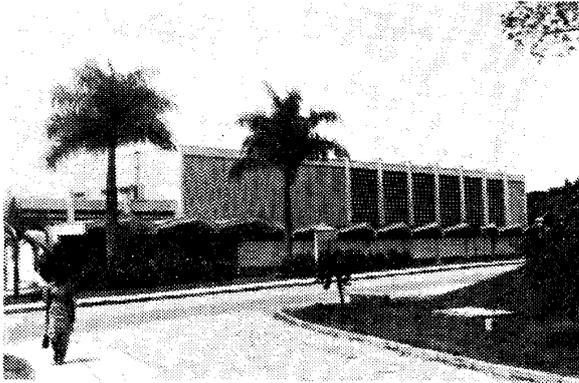


写真1 マラヤ大学図書館

てよいという連絡を受け、出発のおくれる前田君をのこして、栗本君とわたくしども家族が現地に到着したのは2月19日である。

クアラルンプール空港に着いてみると、この講座の件で日本に連絡に来られた経済学部長のウング・アジズ教授、当時の文学部長のタニ・ナヤガン教授、中国研究科主任のホー・ペン・ヨク現文学部長、歴史学科主任のワン・ガン・ウー教授らのにこやかなお出迎えを受けた。そして、この寄贈講座に対する大学側での慎重な審議経過と、いま空港で見る晴れやかな、マラヤ・中国・印度系の代表学者の一致した心からの歓迎的態度を心中で結び合わせ、1週間足どめの不安もようやくけしとんだ。

到着してからの1週間はホテル住まいで、マラヤ大学関係部局や大使館へのあいさつ、大学側との基本的な打合せ、家さがしなどで目のまわるような思いをしたが、2月25日に住居も安定した。2月の最終日に前田成文君も1週間おくれで無事到着、マラヤ派遣部隊がめでたく勢ぞろいし、3月1日には大学内に日本研究講座用のオフィス（研究室）を2部屋もらって本番5分前の準備を始めることになった。

マラヤ大学における日本研究 講座受入れ方

マラヤ大学は1957年に初講義を行なってい

るが、独立の国立大学として発足したのは1962年であり、マレーシアのラーマン首相自身を総長とするきわめて新しい、しかもこの国で唯一の総合大学である。現在、文・理・農・工・医・教育・経済の7学部であり、日本研究講座は文学部に所属している。わたくしの方は文学部歴史学科の visiting professor として、「日本の近代化」を、栗本・前田両君は文学部中国研究学科の visiting lecturer として「日本語初級」の授業を担当することになった。この大学で独立の「日本研究学科」をつくるには、第1、第2、第3学年の各学生を対象とする系統的な授業計画をもち、専攻学生には、おおよそ12単位程度のものを取得させ得るものでなければならない。ところが、この1単位というのがたいへんで、通常、1単位を出す授業に1人（他にチューター若干名）がかかりきらねばならない。1時間の本講義に、平均1時間の個人指導(Tutorial)をせねばならず、個人指導のクラスは10人前後が上限とされるから、50人の通常クラスならチュートリアルクラスのクラスが、講義授業のほかに1週間5クラス加わる。現に、われわれは、ふうふういいながら、3人で2単位出しているのが現状であり、わたくし自身は、12のチュートリアル・クラスをもっている。これでは、マラヤ大学が期待する正規のデグリー・コース(独立の学科ということ)の水準に

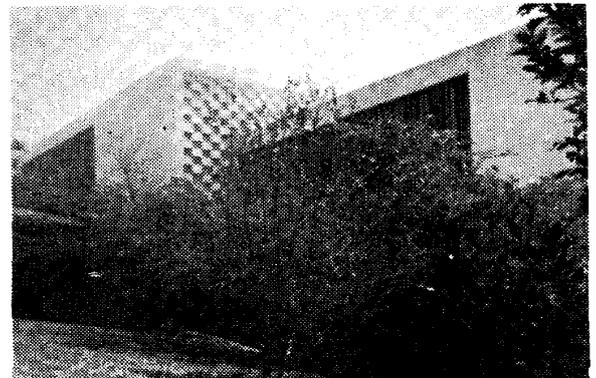


写真2 日本研究講座の行なわれている
文学部レクチャー・シアター

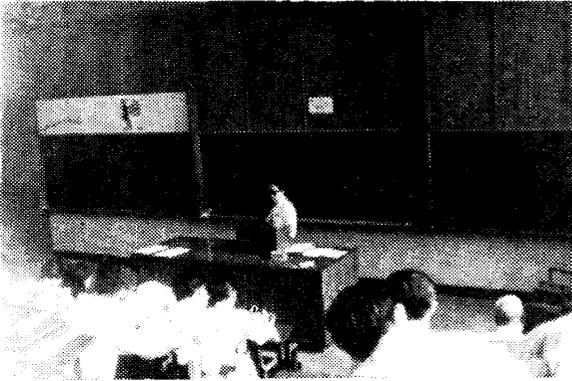


写真3 栗本一男君奮闘の図 白髪の熱心な聴講生の姿も見える



写真4 前田成文君日本語授業

くらべ、外務省の3人というデラックス版寄贈講座も期待の半分にも満たない感じである。

われわれは今のところ、中国研究学科と歴史学科に分かれて所属しているが、とうぶんこのような措置はいたしかたないであろう。マラヤ大学側は文字どおりの最高学府として大威張りで寄贈を受けとり、寄贈した日本側は、筋の通ったその受容態度や期待水準の高さの手前、多少ちごこまりたくなるような気分であった。これは誠によい反省材料となった。低開発国向けの協力援助額の目標である国民所得の1%実現というのも悪くはないが、問題は量や額だけではなく、より以上に質と先方の要求への合致度であるといいたい。1%実現のあかつきにも、質の吟味を忘れ、先方の要求を無視した援助なら、場合によってはないよりも悪いという結果を招くであろう。「のどから手が出るほどのニーズ」に焦点をしばって、十分すぎるほどの援助を考えねば、それは日本側の自己満足に終わるだけである。この日本研究講座にしても、おくれた講師団がいい加減な人選なら、すぐにも「もらわないほうがまし」なものになってしまう。「いま、このわたくしが、日本国外務省の意図とマラヤ大学の期待をうらぎって、ないほうがましのものにしているのではないか」という反省は、正直いって、重苦しいものである。

ろくに準備をするひまもなく当地にやってきた3人のマラヤ・チームは、連日の暑さの中で、重苦しい反省と寄贈教材類についての整理やら授業準備に追われながら、あっと気がつくと、もはや授業開始は目の前に迫っていた。この間、栗本・前田両君は2人の日本留学希望者に対し、自主トレーニングを兼ねて、毎日、課外日本語のインテンシブ・コースを実施した。当時まだクーラーもなかったオフィスで、ほんとうに立派だったと思う。今では、オフィスも3部屋にふえ、各人、クーラー付きの個室を占領するに至った。大学側も創立後、急速な発展を期して、連日多忙な中で、こちらが要求したことには、進んで耳をかたむけ、ほとんど通してくれている。オフィスの増加、クーラーのとりつけ、電話、タイプ・デスク購入などと考えてゆくと、大学側から示されている好意も十分に感じとれる。

授 業 開 始

5月の18日から新学期の学生受講受付やらガイダンスが始まる。希望者いかんと待っていると、あっという間に、用意しておいた教科書がほとんどなくなっている。受付前、関係教授などから、だいたいの見積りをきき、「近代化」は40~50名、「日本語」は30名までと考え、若干の余裕を見込んで準備してき

たのだが、いよいよ幕をあけると、希望者ははるかに多い。困りながらも、教材不足は何とか追加注文でのり切れると考え、希望者全員受講を認めた。「日本語初級」が60名、「近代化」が157名で、それぞれ倍を越す受講者があり、日本への関心が並々でないことを知らされたのである。授業を始めてみて痛切に感じたのは、わたくしの英語による表現能力の不十分さである。これは、割合に簡単な算数の問題として考えられることだと思うが、表現能力が日本語の「3分の1」なら、実力も3分の1しか出せないということである。若い世代には新しい国際派がどんどん育っているので心強いが、戦中派以上の年輩層を考えると、英語で実力が3分の1出せる人というのは、指おり数えられる程度ではないかと思う。わたくしなどももちろん論外で「10分の1」すらあやしい。いまの日本に、この寄贈講座を思いついてよいだけの人材面での裏付けがあるかと問われれば、わたくしは、正直いって首をかしげる。それすら引受けた時には、まだ分かっていなかった。日本の学界に、国際的な表現能力がない多数者が既得権を守ろうとする結果、それをもつ者の「語才」を利用しつつ黙殺する傾向があるのは感心しない。わたくしも、その感心しない人間のひとりであった。だが、今後の日本を考えるなら、語才を黙殺するのではなく、それをどうしてでも、これからの「学者育成計画」にもりこむようにせねばならない。島国の中でしか発言できない学者というのでは、あまりに淋しすぎる。

「日本研究講座」の「日本語初級」は、最初マラヤ大学からの希望もあって、英語メディアのほか、マラヤ語メディアによるものを1本つくろうという計画であった。いままでも、ピース・コーによるお嬢さん2人が大学の日本語を受持ってきているが、それが、中国研究科の中国系学生によってだけ利用され

ているからである。けれども、予定どおり、かりに今年から前田君によってマラヤ・メディアのものを始めても、今後、マラヤ語で日本語の教えられるような人材の補給難は目に見えているので、やめることになった。そのかわり、中国研究科の学生に限らず、ひろく文学部、経済学部の一学年に開放する仕組がとられ、現在、大学院をのぞくと56名の出席者があり、39名の中国系学生につき、15名のマレー系学生が聴講している。だが、漢字がよめるかよめないかが、日本語修得に著しく影響するとすれば、メディアは英語としても、将来、ストリームを分けて、2本立ての初級を用意せねばならないであろう。

同じ観点から、「日本近代化」の方の聴講学生人種別構成を見てみると、調査票にかきこんでもらった155名のうち、100名が中国系、35名が印度系、20名がマレー系となっている。だが、大学に来るまでの学校で使用されていたメディアは全員英語であり、英語系学校以外のものは、ほとんど大学には入って来ないという事実を物語っている。

マレーシアの二重課題性

マレーシアは複合人種国家である。マレーシア全体の構成では、マレー系・中国系・タミール系の構成比が、だいたい5：4：1となるが、首府クアラルンプールでは約3分の2が中国系である。大学の学生に関する人種別構成比もクアラルンプールのそれに近く、2：6：2と中国系が多い。この国は、何よりも複合人種国家としての統一発展という必須課題をもっているが、第2にマレー人中心の統一という課題意識も強く底在しており、第2の課題をめぐっては人種によって利害感情も異なってくるだけに容易な問題ではない。映画館に入って、マレーシア国歌の演奏が行なわれている時、タイ国のような整然とした全員起立が見られず、マレー人の多い劇場と、

中国系の人が多い劇場では反応がまるで違うといった実情は、こちらの生活体験者のすべてが語ることである。1967年度よりマラヤ語を唯一の官庁語にするということで、「国語に勝利を」の呼びかけが、あちこちに見られる。にもかかわらず、大学の講義の大多数は英語を媒体としており、学生間のコミュニケーションも英語である。小学校から、英・マレイ・中国・タミールの四つのメディアによることが認められてきたが、マレー系・中国系志願者は減少し、英語系をえらぶ希望者が激増しているということは、まぎれもない事実である。

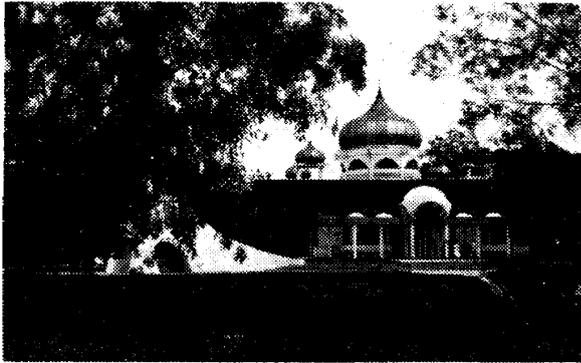


写真5 マラヤ大学構内にあるモスク
金曜日には学生達が集まる

マラヤ語普及運動は着実に義務教育に根を下ろしているが、いまの段階では、複合民族間の大衆媒体として成功しつつあるのであり、エリートのための媒体はやはり英語ということになる。この問題に関連して、われわれはマレーシア文部省から現地協力者としてひとつの依頼を受けたことに簡単にふれておきたい。

いま、マレーシアには中学校の課程（小学校から数えて第7学年からの学年）に第2外

国語を入れる計画がある。その対象として考えられているのが、独・仏とタイ・日の4カ国語であり、「日本語の中学3年間への導入をどのようにすべきか」という準備的打診が、われわれに対して行なわれたのである。日本を重要視していることがこれでも分かるし、それは、日本がマレーシア商品の輸出先（買手）として、米・英をしのぐ第一の顧客になっていることを考えれば、別に不思議ではない。ただ、マレーシア文部省がそれを考える理由のひとつに、『中国系の生徒は「マ・英・中」と三つのメディアをもつのにに対し、マレー系生徒は「マ・英」の二つだから、これを三つにすることが望ましい』といった説明をきくと、どうも分からなくなってくる。中学に日本語課程がおかれるのは、うれしいことだが、その日本語課程をとるのは、選択というのなら、マレー系でなく中国系の生徒ではなからうか。マレーシアの経済をおさえ、インテリの養成所の3分の2をおさえつつある中国系のひとびとをかかえながら、マレイ人種によるマラヤナイゼーションを講釈されると、わたくしは「やりすぎでは危ない」という不安をかすかに感じるのである。

ともあれ、もし中学にも日本語が選択科目として位置づけられれば、大学の日本語の将来はますます明かるい。栗本・前田両君のクラスの学生たちは、いま、Malaysian Society of Japanese Languageをつくる下準備を進めている。将来、このような Society が中心になり、マレーシアの日本に対する関心と理解がいちだんと伸びることを切に願っている次第である。